

柳広司氏の『南風（まぜ）に乗る』の主人公の瀬長亀次郎氏を「1」で書いたので、「2」で、山之口獏氏と中野好夫氏について書きたい。

山之口獏氏は、沖縄から上京した「貧乏詩人」で、指笛と沖縄舞踊の名手だそう。東京から沖縄を恋い慕い、詩を歌っている。「ぼくはしばしば / 波上の風景をおもい出すのだ / 東支那海のあの藍色 / 藍色を見おろして / 巨大な首を据えていた断崖 / 断崖のむこうの / 慶良間島 / くり舟 / 山原（やんばる）船の / なつかしい海 / 沖縄人のおもい出さずにはいられない風景」。沖縄を忘れるなど強く歌っている。獏氏は戦時中に発表した詩「ねずみ」がフランス文学誌『レ・レットル・ヌーヴェル』に翻訳、掲載され、注目を浴びる。34年ぶりに那覇に里帰りすると、友人と彼の詩を愛する人たちに大歓迎される。懐かしさと同時に、米軍執政下にいるような思いがした。「ボクハ東京ニ出テキテ、誰ニデモ通ジル平易ナ言葉ヲ使ツテ、ナルベク普遍的ナ詩ヲ書コウトシテキタ。誰ニデモ通ジル日本語デ詩ヲ書コウトシタ。ケレド、ボクハ沖縄ニ留マツテ、沖縄語デ詩ヲ書クベキダッタノカモシレナイ。ボクハ、間違ッタノカモシレナイ…」葬儀委員長は、獏氏の第一詩集『思弁の苑』に「日本のほんとうの詩は山之口のような人達からはじまる」と序文を寄せた金子光晴氏が務めた。葬儀には大勢の人が参列し、沖縄が生んだ詩人の畢生、山之口獏氏の死を悼んだという。私は、獏氏の詩集を読んだことはないが、沖縄を愛し、その行く末を案じ続けた思いは、よく理解することができる。池明観先生は、韓国の軍政時代に命を賭して闘った民主化運動を、岩波の月刊誌『世界』の「韓国からの通信」に連載し、世界に発信した。しかし、東京にいて、民主化闘争に加わらなかったことを悔やむと言うようなことを書いていた。4歳年下の瀬長氏は身を削って沖縄のために闘っていたが、獏氏は東京にいて詩を書いていたことに鬱々とした思いを募らせていたのではないかと推察する。

中野好夫氏は自分を「偽善家、蝮の裔（すえ）」と自虐的に言い、他人からは「叡山僧兵の大將」とニックネームを付けられている著名な英文学者である。彼は、自費で「沖縄資料センター」を立ち上げた。センターを設立したのは、那覇市長だった瀬長亀次郎氏が米軍の理不尽な布令によって市長職を追われ、後任を決める選挙についてコメントを求められたことからであったと言う。本土には、沖縄を知るための資料がないので、東京に部屋を借り、資料を集め、整理し、沖縄を本土の問題にすることを目指した訳である。そこには「あの戦争で、沖縄では住民の四人に一人が殺された。敗戦後、日本はその沖縄を切り捨てた。本土独立のために沖縄をアメリカに差し出した。その事実を知りながら、知らんぷり。自分だけが復興して、沖縄が復帰を望んでいるのを知りながら、平気の平左でいるわけには、さすがになあ」という言葉が背後にある。瀬長氏が、米軍民政府によって、拒否されていた本土への渡航を11年間求め続け、16回目の申請で許可された。飛行機のタラップから降りてきた瀬長氏を中野氏は「ようこそ本土に。沖縄資料センターの中野です。よくいらっしやいました」と出迎えたシーンは感動的である。人権を尊重し、平和を求める二人の間には、相通じる深い絆があった。中野氏から、生きるということは人間の尊厳が奪われている現実を直視し、そのことに誠実に関わることだと教えられた。

著者・柳氏は、沖縄を愛し、南風（まぜ）に乗らなければならないのは本土なんだと言っている。私は、沖縄県民の人権、民主、自治、平和に対する思想と行動に敬意を払い、本土が沖縄化すれば、日本は変わると思っている。